

川下の風景⑳

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【子の思い、親の願い】

この冬、東京で暮らす娘がインフル A 型に罹患し寝込んだ。40 度近くの高熱が二日続き、一人暮らしの身には、さぞ不便も多かっただろうが、それよりも不安と心細さが募っただろうと、私にも経験があるから想像ができる。

私も息子や娘と同じで、18 歳で実家を出た。進学のために大阪に下宿したのだ。風呂、トイレ共同。昼間でも薄暗く、年中小便臭いトイレの匂いが廊下に立ち込める男のみの安下宿だった。家賃は月 3 万程度だったろうか。奨学金を借り、親から家賃分は仕送りをしてもらい、意気揚々と人生初の一人暮らしを始めた。風邪を引いたのはその年だった。まだ学生生活も始まって間もない頃、訪ねてくれる友人も彼女もいない部屋で、一人唸りながら寝ているしかない時間。きっと娘も同じように病床の部屋の天井を見たはずだ。実家の安心と、親の有難さに涙を浮かべる夜を。

しかし、これはある意味、人生の儀式だろう。いつの時代もそんな場面があったはずだ。遠い昔には 10 歳に満たない子どもが奉公に出て、早々に親元を離れて暮らす光景など当たり前で、戦中戦後の貧しい時代は集団就職で故郷を遠く離れて都会で暮らす。昨日まで知らなかった相手と恋愛感情抜きで見合いをして、そのまま家族を形成したり、田舎ではいきなり義父母や義兄弟の面倒をみる羽目になるなんてことも多かった。やはり、同じように薄暗い天井を見つめながら、枕を濡らす夜がそこにもあっただろう。

親はいつまでも子どもの面倒を見てやれない。それは皆わかっているはずだ。しかし、その自立のタイミングを逃すと、いつしか老いた親は子どもに将来の面倒をみてもらおうと期待してしまう。8050 問題とは、そんな親子の駆け引きが招いた結果でもある。

娘が病床で考えたことは、親の有難さと一人暮らしの心細さであったに違いないが、さらには「ひとりでは生きていけない」という当たり前の感覚であり、「他人と共に暮らすメリット」について考えただろう。早く結婚して欲しいと無責任なことは思わないが、子どもがちゃんと人生で賢い選択をして、自ら生きる道を切り開いてくれればよいなと思いながら、親は熱を出して苦しんでいる我が子を思い、出来れば変わってあげたいと切に願っているのだ。

【視点】

年末、25 年使っているバリカンで散髪をした。別に年末だから、という感慨があるわけではなく、毎月のルーティーンとして髪を切るに過ぎない。何より 25 年丸刈りで通してきたわけだから、自分の毛量がある一定の許容範囲を越えると刈ら

ずにはいられなくなる。庭の芝生が不揃いに伸びてきて、それが鬱陶しく感じる感覚だ。

私の丸刈りには、25 年変えない決まりがある。

夏だろうが、雪の降る冬だろうが、真っ裸で風呂場に入り、シャワーで髪を濡らす。まずは裾から。

9mm のアタッチメントを使って刈り上げる。後頭部がどう刈られていくのか見えないが、これは長年の勘というか、まあ適当にこんなものだろうという感覚でやる。そして、頭頂部は 12mm で少し長めを意識して仕上げる。時間にして 5 分～10 分。これですっきり、また一か月を快適に過ごせる。何せ 25 年使っているバリカんだ。先日、メーカー名を何気に見たら、ナショナル製だった。年代を感じる。

そんな 25 年決めごとのようにやってきた散髪を、この年末は少し変えてみた。裾を 3mm にしてみたのだ。裾は短いほうが、伸びた時の鬱陶しさがなくていい。感触は悪くなかった。側面は鏡で見えるし、後頭部の仕上がりも手触りで感触を確かめた。視えないが、感触で納得している。

しかし、後で後頭部を自撮りしてみると、見事にガタガタになっていた。まじまじと、自分の後頭部を視るなんてどれぐらいぶりだろう。その仕上がり振りを笑って眺めていたが、家族は別にそんなもんだろうと見ている。いつもこんなガタガタなのか、と初めて気付く機会を得たわけだ。

昔、所ジョージが TV で言っていたが、「たまには風呂に入るとき、いつもと逆向きに入ってみろよ。いつもと違う景色が見えるから」と話していた。いつもと違う浴室の壁、いつもあるはずのシャワーヘッドが、そこにはない風景。

こんなものだろうと手触りで想像している自らの後頭部と、写真という客観像を眺める自分の視点。世の中、視ているようで視ていないことなどたくさんある。意図的なのか、非意図的なのか、いずれにしても私たち援助職は自らの「理解のフレーム」を知らずに持ち続け、そのフレーム外のものには視ていない。しかし、クライアントの生活像はそのフレームに収まるものだろうか。脱フレーム化するために理論がある。変化がある。

【家族性】

そのジェノグラムで家族構成を視たとき、私は「おや?」と思った。違和感というのではない。私が推測で思い描いていた家族像と大きく違っていたからだ。そこに正解、不正解はない。あるのは、家族の選択だ。

再びジェノグラムを見つめる。この家族の選択の背景には何があっただろうと思ひめぐらす。家族の選択で顕著に現れるのは、どこで、誰と、どのように暮らすかだ。どちらかの親世代と同居なのか、結婚後、新たに住まいを構えるのか。誰と、どこで暮らすかは、家族成員の選択による。これは新たな家族システムの構築に関わるから、誰がどのように決めるのがポイントになる。次に必要な選択は新たな家族計画だろう。昔のように子供を労働力として加算していく時代ではない。むしろ、生まれてからの養育費、特に学費のことや住まいのことを考えれば、ある程度夫婦間での話し合いをもとに選択していかなければならない。

先ほどのジェノグラムの家族は、実際に自宅を訪れて得心がいった。家は家族の住まいである。それは目に見える境界線でもある。境界線は、外と内を分けて、外の環境から内の家族を物理的に守るし、家族システムを安定的に稼働させる。守られているからこそ、家族は安心してコミュニケーションを作動させることができる。家族だけの秘密、家族だから言えること、見せられる、共有できる風景。

だからこそ、家には家族の家族性が宿っている。それが第三者に見えやすい家族性と、そうでない場合もある。暮らしぶり、匂い、むしろ私が注目するのは地域性との調和、不調和だ。

これはその地域を歩いてみないと比較できない

2026.2.25 米津達也